

KS

研究社叢書

フィリップ・ラーヴ 犬飼和雄 訳

文学と直感

フィリップ・ラーヴ 犬飼和雄 訳

文学と直感

KENKYUSHA

訳者紹介

犬飼和雄(いぬが い かずお) 1930(昭和5)年神奈川県生まれ。昭和28年東京大学文学部英文科卒業。現在法政大学教授。訳書にホガード『さいごのとりでマサダ』(富士房)、フィンガー『銀の国からの物語』(学習研究社)、また「アメリカ文学作家シリーズ」第六巻(共訳、北星堂)などがある。



KENKYUSHA

〈検印省略〉

文学と直感

昭和47年4月30日 発行

定価 600円
著者 フィリップ・ラーヴ
訳者 犬飼和雄
発行者 小酒井貞一郎
印刷所 研究社印刷株式会社
発行所 研究社出版株式会社
〒162 東京都新宿区神楽坂1-2
TEL. (03) 269・4521(代)
表紙印刷 大平舎美術印刷株式会社
装幀 榎折久美子

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します。

1398-350013-1860

序文

近代における歴史的洞察の発展を代表するものは、今まで実際に見られなかった精神の機能である第六の感覺、つまり、直感であるというニーチェの見解は正しいものであった。しかし、この直感はどのように作用しているであろうか？ 私の見るところでは、それはふたつの作用をしている。ひとつは過去の文化の中では知られていなかった分析の手段としてであり、もうひとつは新しい緊迫した近代的な感受性の根源としてである。一九三六年までさかのぼって、私はこれまで書いた批評的作品の中からこの選集に入れる作品を選びながら、その根源にどれほどひかれていたか思いあつた。ついでにいうと、歴史的理由はばかりか歴史的事実に対する私の強い関心は、その根源にもとづいたものであり、結局は、私の文学的姿勢や判断に影響をおよぼしたのであった。それが私の批評における冒険のいちじるしい特徴のひとつをなしているのです、それだけでこの本の題名に対する十分正当な説明になつていふことと思う。しかしながら、こういつたからといって、私が「歴史主義」という形式的理論に賛成の意を表わしているのだとか、歴史的意識だけがこの本の特質で、読者が当然この本の中で出会うことを期待できる唯一のものであるなどとはとらないでほしい。

私が歴史的認識から発展したものを尊重するのは、かならずしもそれだけとはいえないが、基本的には私が若

い頃マルキシズムにもまれたという事実までさかのぼることができると思う。私は最初その訓練の中に暗に含まれていた多くのものから(たとえば、弁証法的唯物論の形而上学とか労働者階級の救世主的任務など)何年かかかって身をひいたが、それでも、そこからある種の研究方法を得たし、多少なりとも社会的、イデオロギー的問題に関係することができた。そして、あえていえば、希望や期待と結びついた一種のリアリズムや、私の社会観や、想像力の形成において見られるような人間の可能性もそこから得たものであった。私の作品の中には論戦的な調子で書いたものもいくつかあるが、それもまたひとつには、マルキシズムの伝統からきたものである。こういうしながらも、もちろん、私は若い頃、コミunistの文学運動で忠実な黨員が行なった見えすいた欺瞞に攻撃を加えたことを思い出している。それはちょうど、後年において、一方ではニヒリズムに抗議し——すっかり商業化し、古典的なアヴァン・ギャルドという衣服をつけて変装した方が都合よいと心得ている近代のニヒリズムまで含めて——もう一方では、結局は冷然と何の変化ももたらさず、まったく現状維持の、さまざまな空虚な世界の精神主義に抗議したのと同様である。

しかし、影響を受けたものといえればそれだけではない。他のさまざまな歴史的思想の影響力や圧力も認められる。それはひじょうに多くの思想家や作家の作品の中で説かれているもので、ヘーゲルやニーチェのものからカール・マンハイムの社会学やT・S・エリオットの批評(つまり、これは擬古的なノスタルジアに身をまかせないで、もちろん、ときにそうすることもあるが、現代の文化的状況と密接に関係を保っているかぎりにおいてだ)にまでおよんでいる。また、フロイドの理論はたとえ個人の問題を中心にしたものであっても、それ自体特殊な歴史的位置を占めており、その影響を無視できないということはいうまでもない。純粹に文学的な影響についてはあまりにも多様すぎるので、簡単にいちいちあげることにはできない。

他の分野におけるように批評においても、歴史的感覚による研究は、知識ばかりか直感に依存しているものであるということは、あらためて記すまでの必要はほとんどない。もつとも、そこに含まれていると思われるものは特殊な直感であつて、それがどんなものか正確に定義するのはたいへん困難なことである。しかし、そのような直感は、たとえ公式として定義するのはむずかしくとも、容易に認識できるものである。もつとも文学を扱う目的で、アカデミックに歴史的な研究をしていると普通は見落としてしまう。そのような研究はときに一時期流行する方法論にはまりこんでしまうこともある(たとえば、「新批評」がそのような流行のひとつであつた)。しかし、たいていは研究のための研究に歴史的な事実を積み重ねることだけに没頭し、いわばそういつたものが、文学的風潮や観念の形成とどんな関係があるかとか、その中でどのような比重を占めどんな重要性を持っているかなどとはかえりみないものである。別に理由はないが、私の見るところでは、文学的問題を研究している学者は、どんなつまらないことでも多かれ少なかれ事実を正確に述べているかぎり、いつかは役にたつと考える傾向がある。たいていの文学研究者は狭い領域に閉じこもり、事実そのものだけに固執し、歴史的想像力の機能ばかりかその冒険をも回避している。この事実性という問題は、無定形で機械的なものであるにもかかわらず、アメリカの大学における英文科では文学の専門家の理論的根拠になつていってよいが、批評活動にとつてはほとんど何の意味もない。

文学批評家はもし適確に自分の仕事をなすべきだと考えるなら、当然のこととして、事実に対する鋭い感覚を養わなければならない。これがないと、文学批評家は批評ができなくなり、しかも、その感覚を身につけるためには、とりわけ文学研究者に依存しなければならない。だが、文学専門家の単なる仮定的な見解だけでは、批評家を動かすことはできない。事実が価値あるものになるのは、その歴史的な意義が説明され、想像力の産物との

關係が明確にされたときのみである。何の根拠もない事實は宙に迷うだけである。研究者がたまたま學者の引用に利用できるからといって事實を解明しても、それは批評家にとつては何の役にもたない。

この本にはたくさんの小論文や評論が含まれているが、それは以前に出版した二冊の批評集『イメージと觀念』と『神話と發電所』に含まれていたものであった。また、これまで本の形で発表しなかつた短い評論も十いくつが含まれている。この本に入れるのをはぶいたものといへば、ドストエフスキの長篇小説についての論文である。それは、私が近い将来ロシアの小説家についての長い研究を出版するつもりでいるが、その中で独立した章として挿入するつもりだからである。ドストエフスキの短篇小説についての評論は、もとは『家族の友人』と『永遠の夫』というラインハートのペーパー・バックス版の紹介として書いたものであった。これはこの本に再録した（本訳書では割愛）が、それは先に説明した長い研究に組み入れるにはふさわしくなかつたからである。

私はこの本の内容を統一するために、直接政治問題を扱つた作品はすべて除外した。文学批評の論文と直接政治の本質を解説した論文とを混合しては、内容を一本にまとめることができないと考えたからである。

この本の中でいちばん最初に書いた批評は、一九三六年のT・S・エリオットの劇『寺院の殺人』についてのもの（本訳書では割愛）である。これは『パーティザン・レビュー』誌に発表したものであった。この雑誌は当時いぜんとして、もちろんいくぶんあいまいにはなつていたが、アメリカにおける公式のコミュニストの運動と關係を保つていた。いうまでもないことだが、ファシストの忠誠心を非難するという当時の一般的な風潮に反抗して、私がエリオットを弁護したということは、正統で忠実な黨員たちに異端者同然の行為だと強い衝撃をあたえたのであった。私は暗に党の文化政策を非難し、党を去る用意をしていたのであった。そのほんの一年後、私は完全に党の運動とたもとをわかつたのであった。一九三九年、私は党とすっかり対立する立場にまわつてしまつたの

で、『南部レビュー』誌の頁を使ってその政治的検死に相当する「プロレタリア文学」論を發表することができた。その時点で、『パーティザン・レビュー』誌は、私はいぜんとして編集員として仕事をしていたが、スターリン主義とその政治や文化におけるあらゆる主張に公然と敵対するようになっていた。

私はスターリン主義と接した期間は短かったが、たいへん教えられるところがあった——少なくとも私にとつてはそうであつた。その運動の指導者はまったくの便宜主義者であり、下部の黨員は、どんなふうにも指導されようと、宗派的信仰の対象としてソヴィエト連邦とボルシェヴィキ党を取り入れた宗教に改宗した信者、眞の信奉者であるように思われた。スターリン主義者たちは、指導者も下部黨員も口をそろえて、マルキシズムは古典的教義ばかりか、レーニンやトロツキーまでも下劣で有害な形でカリカチュア化したものであると公言した。どんな種類のものであつても、信仰心というものは私の氣質と相容れないもので、私は正統なスターリン主義の秘密組織から何の苦もなく離脱することができた。なお、私は数年にわたつてこのような信仰の実態に嫌悪を抱いていたとつけ加えておいた方がよいであらう。この本の最後の評論を挿入したのは——一九六八年に書いたF・R・リーヴィスとD・H・ロレンスについての批評——ある程度この事実を物語るものである。この評論は実際には過度のロレンス崇拜や、リーヴィスのあまりにも敬虔すぎる、しかもまったく無知な勧告によつてロレンスをせつせと宣伝する態度に対するひとつの反動として書いたものであるからである。

私はこの本の中に選んだ作品に、ほとんど何の手も加えなかつた。その理由は、まちがひなくこの本の読みかたのひとつが、アメリカ文学史におけるまったく異なる三時期に応じて書かれた作品として見るところに意義があると考えているからである。その第一の時期とは社会的方向に動いていた三十年代で、当時の急進的な多くの作家たちはソヴィエト流コミニズムに巻きこまれていた。第二の時期はほとんど五十年代の終わりまで続いた

が、基本的には保守的な性格のものであった。この時期を形成したのは、文学的知識人のあいだの特に時代遅れで皮相な信仰の誕生や「伝統」に熱狂的に固執した当時の支配的なグループ、「新批評家」たちであった。その主潮は、いかなる面でも古い左翼思想による政治的な行動や観念に対する急激な反動であった。第三の時期は現代、「揺れ動く」六十年代で、現在進行中のものである。それはほとんど何のまともも示さない時期である——おたがいに対立する各派がただごやごや雑居しているにすぎない。一方では若者たちのあいだに政治的意識の復活や、政治的行動へ向かう傾向が見られ、もう一方では新美学や「新感覚」——ときにそう呼ばれている——の自称の代表者の主張に、たえず注意を引きつけられている。その代表者たちは古典的アヴァン・ギャルドという狂信家的マンネリズム以外のなものも持っていない。彼らはアヴァン・ギャルド的異論を唱えたり反抗をしたりする真似をしているが、一方では彼ら自身がアカデミーそのものになっている。そして、そういった運動を支配しているアカデミーは、芸術的な作品が消費財になったとしても、この上もなく上品ぶった世界の中でちやほやされているのである。

私はときどき、もしアメリカにもうひとつ名前をつけるとすれば「健忘症」^{アムネシア}にすべきだと思ふことがあるが、アメリカの今世紀における歴史的感覺は、慢性的につきからつきへと打ちのめされている。それはちょうど文学的な流行期が猛烈なスピードでおたがいに相手を押しのけ、自分こそ今までの文学創造の最高峰であると主張しているのと同じ現象である。その結果アメリカの文学界は、はなはだしく過去を喪失してしまい、この傾向がひじょうに強くなり、現在では英文科の大学院の学生が「新批評」とはどのようなものなのかごくあいまいな概念しか持つておらず、三十年代の急進的な運動については実際にどうだったのかほとんど何の概念も持つていないということになってしまっている。この選集にもしなにかの価値があるとすれば、それは暗黙のうちに過去三

十年間にアメリカ文学の中に現われた固有の見解を認識できる内容を含み、その立場から、それを再現したとい
う点であらう。

一九六九年四月

フィリップ・ラーヴ

目次

序文

蒼い顔と赤い肌
ペイル・フェイス
レッド・スキン

プロレタリア文学——ひとつの政治的検死

アメリカ文学の経験崇拜

セイレムの黒髪の婦人

自然主義の没落に関する覚え書き

ヘンリー・ジェイムズの評価

i

3

10

28

50

80

96

過去を相続する女主人公

フロイドと文学精神

宗教と知識人

戦後のアメリカの知識人

カフカ紹介

神話と発電所

小説と小説批評

リーヴィスとロレンス

訳者あとがき

文学と直感

ペイル・フ・エイズ
蒼い顔と赤い肌
レッド・スキンの

歴史的に眺めると、アメリカの作家はふたつの極の周囲で集団を形成しているようである。私はそのふたつの極集団を蒼い顔ペイル・フェイスと赤い肌レッド・スキンと呼んでみたい。両者はときおりひとつになろうと努力するが、おたがい何の愛情も持ちあつていない。

ヘンリー・ジェイムズの客間の小説と、ウォルト・ホイットマンの自然の詩とのほかりしれない対立を考えてみよう。メルヴィルの孤独な数十年とその悲劇的な失敗を、マーク・トウェインの騒々しい生涯とその疑わしい成功と比較してみよう。一方の極集団には開拓地や大都會の下層社会の文学があり、もう一方の極集団にはボストンやコンコード〔両地とも十九世紀におけるアメリカ文学の中心地。ことにコンコードは、エマソンが超絶主義の烽火をあげ、アメリカ文学史上に黄金時代をもたらした場所〕の皮相で尊大な宗教じみた文化がある。この事實は、アメリカの創造精神が分裂し、一方にかたよってしまっていることを物語っている。というのは、この極性化の進行にともない、経験と知性の二分化が生まれたからである——つまり、生命力と繊細な感受性、行動とその理論、人生はひとつの機会だという考えかたとひとつの訓練だという考えかたの分裂を生み出したのである。

この相違によって、両者はあらゆる分野で自己を規制する。そういうわけで、レッド・スキンのアメリカの時

代風潮にのつて繁榮してゐるときは、その風潮が原因で、ペイル・フェイスはどこまでも影が薄い存在となつていくのである。社会学的には、両者は貴族と平民に区別できるし、審美的に見ると、一方はアレゴリーと象徴主義を昇華する方向へと引きよせられ、もう一方は粗野で騒々しい自然主義へと傾斜していく。ペイル・フェイスは「知識人」であるが、その精神構造は——ホーソンやジェイムズにおけるように——しばしば普遍的な思考を排除したり拒絶したりするようなものになつてしまふ。ヨーロッパ流の知識と比べると、余分な要素と不足してゐる要素とを同時に持ちあわせてゐるのである。レッド・スキンは「無教養」という形容詞がふさわしいが、それはレッド・スキンがろくな教育も受けてゐないからではなくて——受けてゐるかもしれないし、そうでないかもしれない——その反応が本質的に感情的、衝動的で、教養に欠けてゐるからである。ペイル・フェイスはたえず宗教的な規範を渴望し、現実から遊離して洗練された世界へと向かつていく。一方レッド・スキンは、環境から生まれる現象になにかしら反抗してゐるときでも、その環境を受け入れ、ときには環境と融和するまでになる。最高の時点では、ペイル・フェイスは精緻で道徳的な気分を抱いて活動し、最低の時点では、お上品ぶつた俗物的な知識をひけらかすものとなる。レッド・スキンは、最高の場合には人間の生命力と情熱を描くが、最悪の場合には下卑で知性のないものとなり、攻撃性と順応性をまぜあわせ、もつとも粗野な開拓者精神へと立ちもどるのである。

ジェイムズとホイットマンは、同時代人としてただおたがいに軽蔑しあつていただけだが、このふたりはペイル・フェイスとレッド・スキンの分裂を示してゐるもつとも純粋な実例なのである。⁽¹⁾一八六五年『太鼓の響き』の批評にあつて、若いジェイムズはホイットマンに向かつて絶叫するのを止め、脚韻と韻律の分野の片隅でおとなしく坐つてゐるようにと忠告し、もつたいぶつた平民改革者を叱りつけた。一方改革者は、良心のとがめや